

第212回 エフエム栃木放送番組審議会 議事録

1 開催年月日 平成27年10月1日(木) 11:00~12:30

2 開催場所 宇都宮グランドホテル

3 委員の出席 委員総数 7人  
出席委員数 7人

(1) 出席委員の氏名 片山 貴之 (委員長)  
古磯 勝子 (副委員長)  
早川 富美子  
青木 敬信  
君島 理恵  
畠山 大  
町田 明久

(2) 放送事業者側出席者 大森 敏秋 (代表取締役社長)  
佐藤 望 (放送部長)  
古寺 雄史 (放送部課長)

4 議題 (1) 番組の試聴及び意見交換  
(2) その他  
(3) 次回開催日程について

5 議事の概要

(1) 番組の試聴及び意見交換

9月10日に放送した「B-UP」について、試聴と意見交換を行った。

事業者

9月9日から10日にかけて、台風18号から変わった温帯低気圧の影響で、県内は非常に激しい雨が降り続き、10日の未明、気象庁は、栃木県に数十年に一度の降雨が予想されるとして、大雨の特別警報を発表。土砂災害や河川の増水などに警戒を呼びかけました。

弊社も、9日夜からスタッフを増員して臨時報道体制に入り、JFNネット番組中に、情報を随時、放送していました。10日朝の生ワイド番組「B-UP」も急遽、大雨災害情報を中心にした構成に切り替え、県内各地の様子を電話で伺ったり、中継リポートを入れるなどして、特別編成での放送をおこないました。

## 【 番 組 の 試 聴 】

委員：

番組進行役の井出アナウンサーと、現場に出向いたリポーター陣は、ともに落ち着いて的確に情報を伝えていた。

特に、井出アナウンサーは、「立つとどのくらいのところまで？」や、「花火大会をやっている場所でしょうか？」などと、リスナーがイメージしやすいように表現に工夫をしつつ、一つ一つの質問の答えを確認しながら、丁寧に情報を伝えようとしていたことに好感が持てた。

事業者：

井出アナウンサーは、東日本大震災発生時、生放送を担当していて、その時の経験が、今回、活かたはずだ。

委員：

井出さんは、番組の前半では被害の様子を伺いながら、手探りでやっていたと感じた。

一方、リポーター陣は現地に赴き、その被害の深刻さを肌で感じ、緊迫感のあるレポートを届けていた。その様子から、井出さんも徐々に話のトーンが変わっていったようだ。

委員：

番組前半で、まだ大雨が続いていた状況の中にも関わらず、「心に晴れマーク」という通常の放送での定番のセリフを言ってしまったのは、表現として適切ではなかったと思う。

委員：

田川からのレポートで、氾濫危険水位や氾濫水位という2つの指標用語を使って説明していたが、その水位がどれだけ危険な状況なのか、今ひとつわかりにくい表現になってしまった。

また、「アンダーパス」など、聞き慣れない用語が時折使われていたが、災害時には幅広い層がその放送を聴くことを念頭に置いて、難解な用語は避けるべきだ。

委員：

避難所からのレポートの時など、一部、災害報道としては違和感のある曲調のBGMが流れていた。

また、番組冒頭に流した気象台の会見でも、BGMがあって話の内容が聞き取りにくくなった場面もあり、現場からの情報を伝える場面では、BGMの音量を抑えてほしかった。

事業者：

朝用に用意していたBGM群の中から、特別編成の内容を考えて選曲していたが、もう少し数や種類に用意があれば、より適切なBGMを選曲出来たと思う。

委員：

今後、災害時の報道を想定して、このような場面でも流せるBGMを事前に相談し合って、あらかじめ用意しておいた方がよいと思う。

委員：

特別編成で番組を放送することにした経緯は？

事業者：

キー局FM東京の対応や、県域他局の状況を見ながら、B-U Pについては特別編成で対応することに決めた。

委員：

公共性が求められる放送メディアとして、今回の判断は妥当だ。

状況が刻々と変化中、手探りの報道ではあったが、実際に被害がなかった人にも災害がすぐそこまでやってきていたことを伝えることができ、警鐘になったはずだ。

委員：

緊急時の報道には、いろいろと配慮が必要な内容もあるが、今回の放送では、急遽特別編成を組んだにも関わらず、リスナーの期待に充分に応えた有意義で頼りになる情報を届けていたと思う。

東日本大震災の経験を活かし、限られた人数の中でも特別編成を組んで、臨機応変に対応して、県民に向けて有意義な放送をしたことに敬意を表したい。

委員：

災害時に強いと思っていた他の放送局の放送は、広域情報ばかりで栃木の細かな情報をなかなか伝えてくれていなかった。

事業者：

NHKは全国向けの報道だったが、弊社も県内AM局も栃木県内の情報を多く報道出来ていた。弊社の今回の放送には、県外のFM局からも評価の声があった。

委員：

ラジオの強みは、リスナーとの繋がりであり、災害報道にあたっては、一つ一つの情報を丁寧に拾いながらも、リスナーの気持ちに寄り添って、番組を作っていくべきだ。

緊急時に、FM栃木として、何が出来るのか？

楽しいだけでなく、こうした時に頼りになる放送を望みたい。

今回のように臨機応変に対応できるよう、今回の検証をしっかりと行い、さらに今後、避難訓練のように、どのように災害報道番組をやるのかを日頃からシミュレートしておくべきだ。

委員：

避難情報の他には、山間部では降雨量が一定の量を超えると通行止めになる箇所があり、そのような可能性のある道路についての情報も今後検討してほしい。

委員：

今回の災害時、情報はSNSが早かった。リスナーからのツイートなどを、こうした時でも、番組でうまく役立てることが出来ればいいと思った。利用を検討する価値があると思う。

(以上)

(2) その他

なし

(3) 次回開催日程について

次回の開催を11月5日(木)とすることについて、全出席委員の了解を得た。

6 答申または改善意見に対してとった措置および年月日  
なし

7 答申または意見の概要を公表した場合、公表の方法および年月日

(1) 放送 10月25日(日)午後7時55分の「レディオベリーインフォメーション」内

(2) 書面 本社事務所に備え置き

(3) インターネット エフエム栃木ホームページ内

8 その他の参考事項  
なし